



医師



新たな風

副院長 正木 道熹

昭和52年4月当院に赴任してから、35年となりました。地域の皆様方の暖かい支援で診療が継続できたことに感謝致します。

振り返ってみると、昭和30年に中部ろうさい病院は、日本が大戦後やっと復興し、産業活動が活発となり、就労中の事故が多くなったことにより、労働者の健康管理・治療が必要となり設立されました。当院が設立して22年経過した頃、私が赴任した頃は、大阪万博が間近に近づき、日本経済が隆盛となり、単なる労災事故のみでなく、総合的に労働者を診る病院への転換期になっていました。赴任当時の院長は、名古屋大学医学部の名誉教授の山田弘三先生でした。名古屋大学医学部耳鼻咽喉科後藤修二名誉教授から岐阜大学耳鼻咽喉科時田喬教授に依頼があり当院に赴任しました。山田弘三院長の口癖は「国民医療は国の経済のバロメーター」であり、機会あるたびに述べられていました。また、「個々の医師はそれぞれの組織でペースメーカーになれ」と口酸っぱく述べていたことが特に強

く記憶に残っています。

労災事故は労働安全衛生法が広く普及し、年々減少しつつあります。しかし、日本経済のバブルが弾け、その後もリーマンショックで日本経済の負の連鎖が止まりません。かつ団塊世代が超高齢者になり、国民医療費が年々増大し、国全体の活力低下が大変危惧されている今日この頃です。国が金を出せば解決できる状況ではありません。人々の意識改革が大きな鍵となります。自ら立つには、《健康管理、就労管理、社会生活管理、日常生活管理》が前提として必要であります。女性が働ける環境整備の必要性が各界で言われています。これに対する当院の対応は不十分であり、さらなる整備が必要と感じています。今後の当院の方向は、高齢勤労者が健康を維持しつつ就労して社会に貢献できるようにする病院組織に変身することです。多くの高齢勤労者が社会に貢献でき、少しでも国民医療費の低減に役立つようにすることです。共に生き残ることです。

★「フィリア・レター」は、中部ろうさい病院が、患者さんに向けて当院の現況や新しい医療情報などを発信したり、患者さまの建設的な意見を反映する広場として発行しています。